一代で養鶏の企業経営に発展
～働きやすい職場づくりを実践～

東栄町　松井光彦さん（株式会社月食鶏（つきしょくけい））
養鶏（肉用鶏）　【令和元年６月２８日掲載】

東栄町で養鶏（肉用鶏）を営む松井光彦さんをご紹介します。就農した17歳の頃から実質的な経営主だったという松井さんは、規模拡大を重ね、養鶏の企業経営に発展させてきました。モバイルを使った作業の進捗状況共有システムを活用するなど、働きやすい職場づくりを実践しています。

松井光彦さん

１７歳で養鶏の世界に飛び込む

同町は地元の名物として親しまれている若鶏肉の加工品「東栄チキン」のブランドを持つ養鶏の盛んな地域です。そのブランド鶏を生産するＪＡ愛知東東栄わかどり生産部は年間 93 万羽の出荷規模があり、そのうち 36 万羽を松井さんが出荷しています。

松井さんが養鶏に出会ったのは、農協職員だった父親に頼まれ、養鶏農家の出荷作業を手伝ったことがきっかけでした。人の下で働くのではなく、自ら経営したいと思っていた松井さんは、養鶏農家に話を聞くうち「これならやっていける」と確信したそうです。そんな折、東栄町では加工を始めとした養鶏のブランド化が始まり、松井さんの住む地域に昭和 51 年、生産団地が作られることになりました。当時高校２年生だった松井さんは、迷わず入ることを決め、学校に通いながら父親の名義で養鶏業をスタートしました。

息子の港さんと

多くの人に出会い、自分磨きにまい進

事業主になる夢を叶えた松井さんでしたが、生産団地に入っている他の養鶏農家たちは自分の親よりも年上の人ばかりでした。可愛がってはもらえるものの、意見は聞いてもらえず、悔しい思いもしたそうです。松井さんは、自分磨きのため、積極的に外へ勉強へ出かけたり、地域の役を引き受けたりするようになりました。

養鶏の作業もこなしながら、それ以外に多い時は週に 10 件近くの用事をこなしていました。鶏舎に新たにひよこを入れる時期は目が離せないため、夜はつきっきりで鶏舎で眠り、そのまま会議へ出かけて行ったこともあるそうです。

「情報も人脈も持っている」と先輩の養鶏農家からも評価され、松井さんは徐々に頼られる存在になっていきました。また高齢で生産団地を離れる農家が出始め、経営継承を相談されるようになりました。松井さんは規模拡大の路線を取ることを決め、空いた施設を譲り受けていきました。就農時は年間出荷羽数８万羽でしたが、30 代前半になる頃には、年間出荷羽数 40 万羽規模の地域の生産団地のうち、20 万羽を松井さんが手がけるようになりました。

人出不足の苦しい時期も経験

順調に規模を拡大していった松井さんでしたが、苦しい時期も経験しました。50 代に入った頃、手伝ってもらっていた両親が、体調の悪化で相次いで作業を離れることになったのです。急な人出不足から、鶏の管理が思うようにできなくなり、病気が出てしまったり、十分に太らせることができなかったりと、成績がみるみる落ちていきました。松井さんは当時のことを「やるべき対処はすべて分かっていたけれど、手が回らず、はがゆい思いをしていた」と振り返ります。

平成 26 年には大学で農業経営を学んだ息子の港さんが就農し、また経理は港さんの妻が担うことになり、経営は軌道に乗り直します。これを機に、鶏舎の管理を従業員に任せる方法や、それまですべて自分でやっていた経理の事務を家族に任せることを考えるようになりました。また、平成 28 年には株式会社化を果たしました。

働きやすい職場づくり

作業の進捗を共有するタブレット端末

松井さんが代表を務める株式会社月食鶏は現在、役員２名、従業員４名、作業時期に応じて勤務するパートタイマー約６名で運営しています。管理する鶏舎は 14 棟、延べ 6000 ㎡にもなります。日々の作業の中で、松井さんは、自主性を尊重することを理念とし「叱責しない人づくり」を常に考えて作業改善しているそうです。

そのひとつが、タブレット端末を使った作業の進み具合の共有化です。従業員３名がそれぞれインターネット通信でつながっているタブレットを持ち、時間帯や場所ごとに項目化された作業の完了報告を付けていきます。またその情報は管理棟のパソコンで松井さんも見ることができます。数多くの鶏舎があるため互いの仕事が見えないことも多く、常に共有することで間違いが少なくなるだけでなく、協力し合おうという連帯感が生まれるそうです。

作業場の備品を誰でも分かりやすいように分類、整頓したり、空きスペースに花を植えたりすることも「自然とごみをポイ捨てしなくなる」アイデアなのだそうです。

整理された備品

今とこれから

現在は、就農６年目の港さんが従業員への仕事の割り振りのほか、入すう（ひよこの導入）や出荷の計画など経営管理に関わること全般を手掛けるようになり、松井さんは一緒に働きながら仕事を引き継いでいます。松井さんは「私が手を出した方が早いけれど、何度でも説明して、息子が自らやってみるように促している。」と話し、裏方に回るようにしているそうです。

また松井さん自身は、今後、高齢化で手掛ける人がいなくなった農地の復活などにも関心があるそうです。経営規模を就農時から 4.5 倍へと拡大してきたことを振り返り「小さな家族経営から、工夫をすればここまで大きくなれる。若い人が担い手となって、地域の農業を今後も長く担っていける仕組みを考えたい」と話していました。

執　　筆：農業経営課
取材協力：新城設楽農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2019, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.